



Agri Topic
あぐりとぴっく

上手な野菜の育て方 ナス



①栽培時期と品種

栽培方法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	品種
苗購入						△	■	■	■	■	■		千両2号 黒陽・筑陽
自家育苗				○		△	■	■	■	■	■		

②栽培上の注意点

- ◆ナスは収穫期が長いので、完熟堆肥を十分に施し深く耕すことが大切である。
- ◆水が不足すると、生育が悪くなり収穫量が上がらず、果実のツヤがなくなり、ハダニ類の被害が多くなりやすい。
- ◆日射量が多いほど収量も多くなりやすいので、日当たりの良い場所に作付けする。
- ◆土壤水分が多く、耕土の深い、肥沃な畑が適する。

③畝づくり

- ◆ナスは比較的湿潤な環境を好み葉も多くなりやすいので、畝幅は1~1.2m程度、高さ10~20cmの畝が良い。
- ◆畝は中心がややもり上がり気味のかまぼこ型になるように作り、雨水が畝にたまらないことが、病気の発生を少なくすることにつながる。

④種まき・苗づくり

- ◆種まきは、4月上旬の気温が上り始めた頃に1昼夜温水に浸した種子を、バラまきかスジまきにし、覆土後軽く灌水する。その後発芽するまで新聞紙で覆っておき、発芽し始めたら均一に揃えるためにビニールフィルムでトンネル被覆をする。
- ◆夜間は温度確保のためコモ等をかける。
- ◆発芽が揃うと、日中は換気をするとともに、丈夫な苗にするため混み合った部分を2~3cm間隔に間引く。
- ◆本葉2枚の時に仮植をするが、定植時の植え傷みを避けるために、直径12cmのポリ鉢に植え込んでおく。
- ◆生育状態をよく見て灌水の時に液肥を施す。(1000倍溶液…液肥1mlを水1ℓに溶かす)

害虫

アブラムシ・テントウムシダマシ

スミチオン乳剤100ml

(使用時期) 収穫前日まで (使用回数) 5回
(使用料・方法) 1ccを水1ℓに溶かし葉の表裏にかかるように散布

ハダニ類

アファーム乳剤100ml

(使用時期) 収穫前日まで (使用回数) 2回
(使用料・方法) 1ccを水2ℓに溶かし葉の表裏にかかるように散布

⑤本田肥料

- ◆定植2ヶ月前に1坪に完熟堆肥(牛ふん)10kg、苦土セルカ500gを施し深く耕す。
- ◆定植20日前くらい前に1坪に野菜化成600g程度全面に施し、耕うん畝立てを行う。
- ◆追肥は定植1ヶ月後に1回目、実がなり始めたら2週間おきくらいに1株あたり野菜化成肥料50gを追肥します。
- ◆追肥を散布する時は、畝のかた側に散布をする。

⑥定植

- ◆ナスは、高温を好むので5月上旬の暖かい晴天の日を選んで行う。
- ◆多湿を好むので十分に灌水し定植直後は株元に水をやるようにする。

⑦整枝と枝の誘引

- ◆活着すると下の方の側枝が盛んに伸びてくるので小さいうちにかきとる。
- ◆主枝と勢いの良い側枝2本(1番花の下)を残して3本仕立てにする。
- ◆主枝と2本の側枝が伸びてくれれば、風による枝裂けや果実の重みによる枝垂れが心配になるので、支柱に側枝を誘引することが大切である。

⑧灌水と敷きわら

- ◆定植後活着までは、午前中に灌水を行う。
- ◆夏場に乾燥が続くと、生育が遅れるとともに品質が悪くなりやすいので、朝か夕方の気温が低い時間帯を見計らってたっぷりと水やりをする。
- ◆梅雨明け後は敷わらなどを厚くし、乾燥防止と地温を下げるよう努める。
- ◆株もとに乾燥牛ふんをひくと、雑草が抜きやすいのと少しでも肥料切れを防ぐことができる。

参考

- ナスは肥料が切れると実が大きくなりにくい。肥料の効きは花の中を観察し、雌しべの長さが雄しべより長ければ肥料が効いているが、短い時は肥料不足のサイン。
- 一番花をとることで、実を育てるために使われるはずだった養分を、株を成長させるために使うことができる。
- 自根(実生)苗は連作障害の可能性があるので、ピーマン・トマト・じゃがいも・しとうの後には作付けしないようにする。接木苗は自根苗よりも病気や害虫に強く、連作障害も起こりにくいが、価格は割高。